

名古屋市における新来コリアンの流入とコリアンタウンの形成

著者	浮葉 正親
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	69
ページ	179-186
発行年	2007-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001425

名古屋市における新来コリアンの流入とコリアンタウンの形成

浮葉 正親

名古屋大学留学生センター助教授

はじめに

この報告は、名古屋市に新たに形成されつつあるコリアンタウンの現況とその成立のプロセスを主にインタビュー調査によって跡付けようとするものである。

まだ調査は端緒についたばかりであるが、名古屋市の場合、新来コリアンの流入によって形成されたコリアンタウンと在日コリアンとの接点はあまり見出せないように思われる。もちろん、個々の新来コリアンは日本社会への参入のプロセスで在日コリアンと接することはある。しかし、新来コリアンへのインタビューでは、在日コリアンに対する違和感を表明する発言に出会うことが多かった。おそらく在日コリアン側も同じような感想を持っているものと推測できるが、今回の研究では在日コリアン側へのインタビューは行っていない。この点については次回の課題とし、この報告では、1990年代の半ばから名古屋の歓楽街に出現したコリアンタウンに焦点を当て、そこを足場にそれまでの在日コリアン社会とは異なるコミュニティ（さらにいえば、エスニシティ）を形成しつつある新来コリアンの生活に少しでも迫っていきたいと考えている。

1 コリアンタウンの形成——名古屋市の概況

名古屋市の韓国人人口は2万人を超える。ただし、東京の荒川区や大阪の生野区のような集住地域がないため、「在日が見えにくい街だ」（名古屋の在日コリアン取材した新聞記者・奈賀悟の言葉〔奈賀1993:42〕）といわれている。ただし、名古屋にも「駅西」「駅裏」と呼ばれる名古屋駅新幹線口周辺（中村区椿町）に、戦後まもなく「国際マーケット」と呼ばれる闇市ができ、朝鮮人の集住地域が形成されたことがある¹⁾。この一帯に住み着いた人々の多くはいわゆる不法占拠であったため、1964年の東海道新幹線の開通によって立ち退きを命ぜられた。駅西の朝鮮人街は姿を消すが、現在でも、この一帯には焼肉店やキムチ惣菜店、民族系の金融機関や学校などがあり、1990年代まで、「コリアンタウン」といえば、駅西を思い浮かべる人が多かった。

しかし、1990年代の半ばから、名古屋の歓楽街である中区栄町・新栄町付近に韓国料理店や雑貨店などが増え始め、ハングル文字で書かれた看板が目につくようになった。とくに通称「女子大小路」（商店街の名称は「栄ウォーク街」と呼ばれる栄4丁目の池

田公園付近と都心環状線を挟んで隣接する新栄1丁目付近には、新来コリアンのための飲食店や雑貨店、美容院等が立ち並び、聞き取り調査を行った2003年には、すでにコリアンタウンが形成されていた。この地域にはそれ以前から韓国クラブが多くあり、日本語がほとんどできないホステスたちのために、美容院や衣料品店、ビデオ貸与や送金のできる雑貨店、深夜も配達可能な中華料理店、明け方まで営業するナイトクラブなどが次々にできたといわれている。これらの店は、従業員もほとんどが新来コリアンであり、日本語学校や専門学校、大学に通う留学生などが多く、時には観光ビザ等で入国したままの超過滞在者も働いている。

1980年代に日本で韓国クラブが増えた背景には、韓国における風俗産業（「遊興業所」と呼ばれる「ルームサロン」等、主に社用族の接待に使われる）の発達²⁾があると思われる。また、日本から韓国へのいわゆる「キーセン旅行」で遊びを覚えた日本人男性が韓国クラブに通うようになったという指摘もある³⁾。さらに、韓国社会での離婚の増加と離婚を家門の恥とする規範意識の狭間で苦しんだ女性たちが日本に脱出口を求めたという事情もあったらしい（[呉善花1990:86-95]の指摘）。1980年代のバブル経済の最盛期に韓国クラブは増え続け、バブル崩壊後に減少したものの根強い人気を保っているようである。1989年に韓国で海外旅行が自由化されたことも、短期滞在を繰り返しながら日本に出稼ぎに行くことを可能にした。ホステスたちの日本での生活に便宜を図るコリアンタウンの成立は、一方で、1980年代後半から急増した留学生たちにアルバイトの場を提供した。2002年からこの地域の雑貨店でアルバイトをしている留学生Kさん（1972年生まれ、男性）によれば、勤務時間は午後11時から午前4時までであり、仕事を終えたホステスたちのマンションにビデオテープや軽食類を配達するのが主な仕事であるという。韓国人ホステスと留学生という異質な集団の交差する場所に成立したのがコリアンタウンであるといえる。

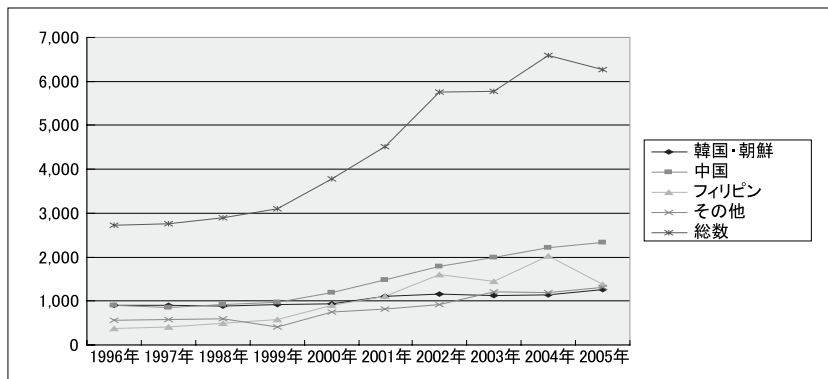
この地域で発行されているフリーペーパー「週刊展望台」1997年2月4日号（第15号）によれば、この地域（栄・新栄）に34軒、高級店が密集する錦に45軒の韓国クラブの電話番号が記されているが、同紙（月刊化され「名古屋展望台」と改名）2004年12月号（第195号）によれば、栄・新栄に15軒、錦に35軒となっており、7年間でその数が減少した様子が見える。その一方、韓国飲食店（ただし、栄・新栄以外も含む）は、1997年が31軒であるのに対して、2004年は73軒と倍増している。韓国飲食店が増加した背景には、日韓W杯共同開催や韓流ブームによる日本人客の増加があると思われる。新来コリアンの流入によって生まれた、新来コリアンによる新来コリアンのための街は日本人客を吸引することで拡大しているように見えるが、本来の顧客であるホステスたちが減っているとすれば、すでに飽和点に達しているとも考えられる。最近では、競争の厳しいこの地域を避けて飲食店がオープンする傾向もある。

なお、名古屋市で新しいコリアンタウンが出現した地域（とくに池田公園周辺）は

1980年代からフィリピン・パプが多いことでも知られている⁴⁾。最近は中国系の風俗営業店も増えており、夕方ともなると日本語よりも外国語を耳にすることが多い街となっている。ちなみに、この地域が含まれる名古屋市中区の過去10年間の外国人登録者数の推移は図表1のとおりである。中国人が倍増、フィリピン人が4倍以上に増えているのに比べ、韓国人は2000年以降ほぼ横ばい（微増）となっている。外国人登録と居住地、勤め先がすべて一致するとは限らないが、この地域の多国籍化はますます進行しているようである。

図表1 名古屋市中区における外国人人口の推移（名古屋統計年鑑より）

	韓国・朝鮮	中国	フィリピン	その他	総数
1996年	898	899	378	557	2,732
1997年	898	859	414	585	2,756
1998年	883	922	493	596	2,894
1999年	921	974	571	414	3,100
2000年	943	1,194	910	741	3,788
2001年	1,099	1,482	1,102	825	4,508
2002年	1,162	1,796	1,607	914	5,749
2003年	1,120	1,990	1,446	1,216	5,772
2004年	1,145	2,221	2,029	1,188	6,583
2005年	1,258	2,336	1,376	1,303	6,263



2 インタビューの内容から

ここでは、以下の3人の新来コリアン、1) 中華料理店経営者Bさん、2) 韓国雑貨店でアルバイトしたことのあるSさん、3) 在日コリアンのキムチ惣菜店でアルバイトしたことのあるGさん、のインタビューの内容を報告する。BさんとSさんの話からは、この地域にコリアンタウンが形成されるプロセスをうかがうことができる。また、Gさんの話には、新来コリアンの在日コリアンに対する違和感が表明されている。なお、インタビューはすべて2003年7月～9月に行われ、その時点を現在とする。

1) 中華料理店「コリアタウン」の経営者Bさん（1962年生まれ、男性）の話

1993年来日、名古屋市内の私立大学に入学。韓国で大学を出た後、土木技師をしていたが、事業を始めて失敗。はじめからビジネスをする目的で日本に来た。それ以前に1988年来日、1年ほど滞在した（詳細不明）。名古屋は東京、大阪の中間であり、事業を起こすのに便利だと考えた。名古屋の大学を調べたが、当時は名古屋大学とその大学しかないと思っていた。なるべく長くビザをもらうため、学部から入り、留年や休学を繰り返し、大学院にも進学している（現在も在学中）。

名古屋に来た当初は所持金が3万円しかなく、大学で会った韓国人留学生の部屋に転がり込んだ。1ヵ月ほどしてから錦の韓国クラブで働き始め、店長（マネージャー）の仕事で1年間続けた。それから土方、ガイド、翻訳の仕事などをしてお金を貯めた。

1995年3月、180万円の貯金とやくざから200万円を借りて、中華料理店を始めた。厨房に2人、ホールに女性住業員1人を雇い、配達は自分がやった。客は韓国クラブのホステスばかりでなく、当時は景気がよかったので、駐在員が多かった。在日コリアンの客は少なく、旅行で本場の味を知った日本人がよく訪ねてくれた。開業後2年半ほどしてから24時間営業するようになった。今でも睡眠時間4時間で働いている。

この近くに韓国料理店が増え始めたのはここ3年くらいである。ここより6ヵ月前に商売を始めた韓国料理店「金剛山」、6ヵ月後にできた雑貨店「韓国特送」の成功に刺激されたのだろう。韓国の店が増えたので、商人連合会（商店街組織）をつくり、1ヵ月3,000円（1日100円）ずつ出し合って、自治団体カード（商店街共通利用券）を発行しようという提案をしたことがあるが、自分は留学生であり表に出ることができず、その話は立ち消えとなった。現在、店の並びに韓国人向けのスーパーと外国人向けのスーパー2店舗を運営しているが、その横の駐車場を買い取って、そこに在来式市場（テントを張った庶民的な市場）をつくるのが次の目標。この店に「コリアタウン」という名を付けたのは、そのような夢があったからだ。

名古屋に来てから結婚し、20日前に2番目の子どもが生まれた。将来はやはり韓国に帰りたいと考えている。（以上、2003年9月17日談）

Bさんが経営する「コリアタウン」は24時間営業であるため、深夜まで働く新来コリアンが仕事明けに立ち寄る憩いの場所となっていた。この店でアルバイトをして学費・生活費を工面した留学生もかなりの数になるといえる。社長は社員の3倍働かないとだめだというBさんは、その日も雨の中オートバイで配達に出かけていた。最近の留学生は、韓国で大学に落ちたり家で遊んでいたりするのが多く、辛抱が足りないというのがBさんの見方だ。Bさんによれば、1年前（2002年）からこの地域の多くの店で中国朝鮮族の留学生が働くようになった。この店にも2人いてまじめによく働くが、韓国人に比べて「ムンチがない（機転が利かない）」し、言い訳が多いように思われるという。

2) 韓国雑貨店でアルバイトしたことのあるSさん（1969年生まれ、女性）の話

日本人と結婚して1995年来日。日本語は大学で勉強していた。96年の秋、1ヵ月半ほど「五

日場(ファイブマート)」という韓国雑貨店で働いたことがある。その頃、韓国人の友人と一緒に、韓国クラブや韓国エステで働くビザのない女性たちに日本語を教えていた。その学校は、やくざの金で韓国語の情報誌(前記のフリーペーパーとは別のもの)を出していたD氏(後に雑貨店の経営者となる)が主宰しており、怪しげな雰囲気の人々が入り出すビルの一室で昼間に授業が行われていた。授業は週3回で、月謝は1ヵ月3万円だった。一緒に日本語を教えていた留学生が「五日場」の店番をしていたおり、1人では手が回らないので手伝ってくれと言われていたからである。

当時、「五日場」の他に「韓国特送」、「銀河食品」という3軒の韓国雑貨店があった。週2回名古屋空港から赤帽の車で、ポッター・チャンサ(風呂敷包で荷物を担いで商売する人の意)の母娘が交代でやって来た。韓国の野菜(エゴマの葉、ズッキーニ、唐辛子など)、サンギョップサル(豚バラ肉)、若鶏、菓、化粧品、雑誌、CDなどを3軒に卸していた。3軒のうち、ビデオの貸与をしていたのは「韓国特送」だけであり、結果的に生き残ったのはそこだけである。

仕事はかなり暇で、電話がかかってくるのは借金の催促の電話ばかりだった。社長は留学生で姉が日本人と結婚していた。後で知ったのだが、社長は賭博にはまり、やくざからかなりの額の借金をしていた。韓国に仕送りをしている男性がかなりの額の送金を頼んだその日、社長はその金をもって夜逃げをした。翌日、店にはたくさんのやくざが押し寄せ、店の商品を持ち出していた。自分も1ヵ月分の給料をもらっていない。(以上、2003年7月30日談)

上記のBさんとSさんの話のなかに出てくる「やくざの金」が「悪質な金融業者の金」なのか「暴力団の金」なのか詳細は分からない。Sさんの話から、韓国クラブや韓国エステで働く女性たちを管理する何らかの組織があるようであり、その組織の資金がコリアンタウンの形成に深く関わっていることは確かなようである。

また、Sさんは別のインタビューで、1990年代の後半に家族で出稼ぎに来ていた新来コリアンの生活を次のように語ってくれた。

1998年ごろ、日本語を教えていたある女性は家族で超過滞在していた。「IMF経済危機」の影響で父親が経営する会社が倒産、数千万円の借金を負った。その借金を返済するために家族が別々に観光ビザで来日し、そのまま超過滞在となった。父親は土建業で、母親は美容院で、その女性と兄がパチンコ店で働いていた。その家族は千種区にある韓国人の開拓教会に住んでおり、日本語の授業もその教会でやった。住居を提供してもらっているからか、超過滞在者としての不安感からか、家族はその教会にかなりの額の献金をしているようであった。その女性は短大で日本語科に通っており(父親の倒産により中退)、ある程度日本語ができたが、日本に在る間に日本語能力試験1級に合格するのを目標にしていた。年齢が近かったので個人的にも親しくなり、ビザのない彼女のために保険証を貸したり、レンタルビデオ店の会員証を作ってあげたりしたこともある。来日2年目で借金返済の目処が立ち、彼女と兄が先に入管に出頭して帰国した。その前に彼女が日本語能力試験に合格したときは本当に嬉しかった。(以上、2003年8月1日談)

1990年代後半の「IMF経済危機」が日本への出稼ぎを増やしたこと、さらに新来コリアンの生活と教会との深い関わりが確認できる。

3) 在日コリアンのキムチ惣菜店でアルバイトしたことのあるGさん (1970年生まれ、男性)

1994年に大学を卒業し、親族が経営する会社に勤めたが、その会社が倒産して失業。2年ほど公務員試験の勉強をしていたが、「IMF経済危機」の影響で公務員試験の受験者が急増し、とても合格する見込みがなかった。そこで、1998年9月に来日、日本人と結婚している姉の家から新栄の日本語学校に通った。台湾人が経営しているその学校は学生のほとんどが中国人だった。授業は午前中だけであり、出席もそれほど厳しくなかった。同級生の韓国人のなかには、韓国人向けの衣料品店を経営している人や、韓国クラブのホステスもいた。まだあまり日本語ができなかったが、いつまでも姉に頼るわけにはいかず、アルバイトを探した。パチンコ店や運送会社など、手当たりしだいに訪ねたが、「もっと日本語ができるようになったら」と言われて断わられた。

その年の11月、姉が講師をしていた名古屋韓国学校の文化祭に出かけ、当時学生会長をしていた在日三世の社長と出会い、駅西のキムチ惣菜店でアルバイトをすることになった。月曜日から金曜日までは6時間、土曜日は8時間働いた。時給は750円で、土曜日だけ働いていた名古屋大学の学生は800円だったので、そのうち時給をあげてくれると社長は言っていたが、母親の反対で結局1年後に辞めるまで同じ時給だった。狭い店で座るところもなく、水仕事が多く、冷蔵庫の整理などをすると手にひび割れができた。一緒に働いている在日のおばさんは社長のいないところでは社長の悪口を言っていたが、自分がそのおばさんに話したことはすべて社長に筒抜けであり、油断がならないと思った。二人とも韓国語があまりできないので、日本語とくに名古屋弁の勉強にはなった。

社長は同じ年齢なのに、自分になんでそんな横柄な態度をとるのか、理解ができずストレスが溜まった。その店はケジャン（渡り蟹の唐辛子味噌漬）が有名であり、テレビ番組にも何度か紹介されたことがある。撮影のあるときは、「お前は奥に引っ込んでいろ。絶対顔を出すな」と言われ、むっとした。韓国語もほとんどできないのに、テレビのニュースなどを見て、「韓国人はさ、だからダメなんだよ」と言われるたびに怒りを覚えた。

大学に合格してからは、姉の紹介で日本人のママさんがやっている小さなクラブの店長さん（マネージャー）を1年やった。月曜日から金曜日まで、午後5時から深夜2時まで働いた。仕事は大変だったが、ママさんもよくしてくれたし、いろんなお客さんにも会えて、キムチの店で働いていたときよりもはるかに楽しかった。(以上、2003年8月29日談)

Gさんの通った日本語学校は上述のコリアンタウンに程近く、そこで働く新来コリアンが多かったにもかかわらず、Gさんは敢えて在日コリアンの店で働く選択をした。その動機は「早く日本語が上手になりたかった」からだという。日本の大学に進学し、日本で就職することを目標としていたGさんは、コリアンタウンのなかで韓国語を使って生活し、ろくに日本語を学ぼうとしない日本語学校のクラスメイトに反発を感じていたらしい。

ただし、在日コリアンの店で働くことで別のストレスを抱え込むことになった。Gさんは、「同じ年齢なのに、自分になんでそんな横柄な態度をとるのか、理解できない」と在日コリアン二世の社長への違和感を語っている。韓国人どうしなら同じ年齢であれば、社長と従業員という関係を越えてもっと親しい関係になれるはずだというのがGさ

んの主張である。しかし、在日コリアンの社長にとって、同じ年齢であることより社長と従業員という関係の方が優先されるものであったことが予測される。

在日コリアンと新来コリアンとの関係のあり方や両社の葛藤については、これまでも田嶋淳子 [1995, 1998] が報告している。田嶋によれば、新来コリアンに対する在日コリアンの評価は必ずしも肯定的とはいえず、日本人居住者から「同じ韓国人」として見られることへの戸惑いや反発がある一方、新来コリアン側も在日コリアンはクールで親しみを感じないという評価を下していると指摘している。[田嶋1995:155-158]

おわりに

以上、3人のインタビューを通して、名古屋市に1990年代半ばごろから新たなコリアンタウンが形成されたプロセスを追跡してみた。コリアンタウンは、韓国クラブや韓国エステで働く女性たちの日本での生活を支えるためのさまざまな便宜から生まれ、急増した留学生たちにアルバイトの場を提供した。そして、それらの風俗営業店が頭打ちとなってからは、留学生や本場の味をもとめてやってくる日本人向けの飲食店が増えている。

日本におけるコリアンタウンの形成については、地理学や経済学からも興味深い報告が出されており（地理学については、[朴2000]、[福本2002]、経済学については、[林2004]など）、それらも参考にしながら、調査を続けたい。

また、今回の調査は新来コリアンを対象としていたため、新来コリアンの流入に対する在日コリアン側の反応を調べるができなかった。二世から三世へと世代交代が進む在日コリアンの経済活動や日本社会との関係に新来コリアンの増加がどんな影響を与えているのか、今後の課題としたい。

注

- 1) 愛知県民団本部長や愛知商銀理事長などを歴任した鄭煥麒氏（1924年生まれ）の回想録『在日を生きる（増補版）』（育英出版社 1998）によれば、駅西に闇市が開かれたのは1946年に入ってからであり、朝鮮赤十字社が運営する「在外戦災同胞救済会」が千坪ほどの土地を名古屋市から借り受け、国際マーケットにバラックを百軒位建て、その家賃を運営資金に当てることになった。木造2階建て、広さ百坪の救済会の建物が建てられ、「故国に引き揚げる極貧者や、故国に身寄りのない者、戦争で家族を失った者、軍属で南方に行き、引き揚げてきたら家族を空襲で失った者等が多数集まり、ごったがえしていた。それらの人々の、宿泊、食事、治療など無料で面倒をみた」という。しかし、闇市の家賃はほとんど入金がなく、救済会の運営は困窮を極め、2、3年して引き揚げがほぼ完了したため、会の活動が終息したので、空いた部屋に民団中村支部を開設したという [pp.116-119, 147-148]。

- 2) 韓国における風俗産業の発展とその社会・文化的背景については、[申1997]を参照。
3) 日本における韓国クラブの成立と発展のプロセスについては、[安1994]の詳細なレポートがある。
4) この地域のフィリピン・パブ街の形成については、[阿部2003]の詳細な報告がある。

文 献

阿部亮吾

2003 「フィリピン・パブ空間の形成とエスニシティをめぐる表象の社会的構築——名古屋市栄ウォーク街を事例に」『人文地理』55 (4), pp.1-23。

安福基子

1994 『赤坂魔境——哀しい韓国の女たち』亜紀書房。

福本 拓

2002 「大阪府における『ニューカマー』の生活空間」『地理科学』57 (4), pp.25-46。

林 永彦

2004 『韓国人企業家——ニューカマーの起業過程とエスニック資源』長崎出版。

駒井洋編

1998 『新来・定住外国人資料集成 上巻』明石書店。

奈賀 悟

1993 「『見えにくい』街ナゴヤから」『青丘』15, 青丘文化社, pp.42-48。

呉 善花

1990 『スカートの風——日本永住をめざす韓国の女たち』三交社。

奥田道大編

1995 『コミュニティとエスニシティ 21世紀の都市社会学2』勁草書房。

朴 賢珠

2000 「都市居住ニューカマーの行動様式——韓国人留学生を中心に」『地域研究』41 (1), pp.1-11。

申 蕙秀 (金早雪訳)

1997 『韓国風俗産業の政治経済学——従属的発展とセクシャル・サービス』新幹社。

田嶋淳子

1995 「世界都市・東京にみる重層的地域社会の現実」奥田道大編 (1995), pp.115-170。

1998 『世界都市・東京のアジア系移住者』学文社。